
へ夕銀 侍と国家と殺人ホール

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ銀 侍と国家と殺人ホール

【Nコード】

N8456S

【作者名】

咲亜

【あらすじ】

ヘタリアと銀魂のコラボ！

変な穴に落ち、ヘタリア（三次元）にトリップしてしまった銀時、新八、神楽、（そしてオリキャラのあの子）は、日独伊枢軸メンバーに、ある怪奇事件を聞く。

始まりは南の小さな村。無数の血痕と共に、村人が姿を消した。

そして今、ヨーロッパを中心に、謎の『穴』が人を消していた。自分達のトリップと、怪奇事件が関係あると考えた銀時達は、その事件を解決しようと、枢軸、連合達と共に試みるのだが、その国家

でさえ、一人、また一人と『穴』に巻き込まれていく。
『穴』の正体は何なのか、銀時達は江戸に帰れるのか。
そして、彼らのピンチに現れた黒い影とは！

という安っぽいあらすじ。

意外にグロい・・・って感じですよ。村のあたり特に。

プロローグ 祖国の血糊の技術は世界一

目の前が真っ暗だ。

あれ、一体何があつた??

確か、新八と、神楽と、あとあの空気読めない美代つて奴と、ちよつとふらふら歩いてたら……、

穴?でっけー穴に落ちた……?

そう、そうだ。で、今その穴の中に……ん?今光つた?

はあ……よかった、この何だか分からない場所から出られ。

ダシヨーン

……は?何今の音、銃声?あ、待ていま俺落ちてる?落下中?!

べしよつ、とか変な音たてて落ちた。カッコ悪いな……んで、ちやんと江戸だよな此処……。

……何なんだこの西洋っていつのか?そーい感じの建物。おいおい、江戸にこんな物……。

パンッ

あ、今度はすごい軽快な銃声だな。……あれ……?何故だか腹

がめっちゃ痛えなあ、あれ？

うわ、視界ぐらぐらだし、撃たれた？何で？

「うわわわわわわっ、何で人がっ?!」

「い、いきなり現れたんだ！俺が知るか！」

「お、お二人とも落ち着いてください。けっこう重傷です・・・せめて応急処置だけでも・・・」

・・・いや、どちらだか知りやしねーけど、その、な・・・。

「これペイント弾じゃね？」

以上、脳内インスピレーション終了。

第一話 空気読めない人No.1 (前書き)

プロローグに前書き書き忘れたのでここに書きます。

再筆なのに文章がテキトーすぎます。ご了承ください。

では本文をどうぞ！

第一話 空気読めない人No.1

「おや、貴方はジャ プ連載中の某侍漫画の主人公にそっくりですね、コスプレですか？」

ペイント弾の話はどうした、と喉まで出かかったが、ぐっと押し止める。

大体、ペイント弾でも痛いもんは痛かった。視界揺れる程痛かった。いやマジで。

「・・・んな訳ねえだろ。つーか此処何処よ、何、異次元？」

「はっ！まさか二次元からの訪問者！？」

「おーい、大丈夫かー、聞こえてるかー？」

目の前で目をキラキラさせてる黒髪の、いかにも日本人という顔をした青年。その横で、厳格そうな顔をしたいかつい青年・・・2でいいか。そして後ろで白旗ばたばたやってるくるんとしたアホ毛の青年3。

・・・何なんだこいつら。

「あー・・・撃ってしまつて悪かった。いつも実弾でやっているのだが、今日はたまたま赤のペイント弾で射撃訓練をしたため、あのような訳の分からん芝居までしてしまった。その・・・着物、か？真っ赤になつているが、洗って返した方がいいだろうな」

「ん？ああ気にしなくていいよ。俺同じのあと三着持つてっから」

「そ、その設定！貴方正真正銘の坂田銀時さんですか！？」

は？と素っ頓狂な声をあげる銀時。

何で俺の名前を知ってた……。気のせいか、青年2と3もちよつと引いてる。(多分気のせいじゃない)

とにかく、青年に頷き返すと、がばつ、と両手を取ってぶんぶん振る。握手？

「わ、私日本と申します！趣味は空気を読んで発言を慎む事です！」

「あ、ああそうか。つ、ついでだ、青年2と3……。お前らは？」

「……。は？ああ、俺はドイツだ。で、こつちが……」

「ヴェ、俺？イタリアだよー！パスタとピッツアが大好きなおちゃめさんです」

「それで銀時さん！どうやってこの世界……。というか三次元？ですか、来たんですか？！私もそちらにいきま」
「あーはいはい分かった分かった」

この日本という奴は、ちょっと……。新八に似ている。いろんな意味で。

と、不意に気付いた事がある。

「なあ、俺と一緒に、……。あー、お前なら知ってつかないかな、神楽と新八と美代が来なかったか？」

何故か自分の事を知っている日本に、安否が気になる三人の事を聞いてみた。

だが日本は、怪訝そうな顔をし、こつ答える。

「神楽・・・さんに、新八さんですか。残念ですが、落ちて来たのは貴方だけです。お二人は、何かご存知ですか？」

「ふむ・・・よく分らないな。イタリア、お前は？」

「ううん、知らない。だっておれ半分シエスタしてたからー」

そうか・・・と少し落胆したような表情のドイツ。だがペイント弾の恨み(あのペイント弾を撃つたのはドイツだった)はしばらく忘れないぞ。

「そうだよな・・・悪いな、何か色々迷惑かけちまって」

「いや、迷惑をかけたのはお前じゃない。撃つてしまつて本当に申し訳ない」

「おいおい、いつまで引きずんだよ。気にしてねえって」

絶対嘘だ。

「あー！せつかくだし、俺んちでパスタ食べてかない？おいしいポロネーゼ作るよ！」

「お、パスタか。そりゃいいな。んじゃ、遠慮なくい「何、パスタ！！؟؟？」」

・・・・・・？！

聞き覚えのある声が、後方から聞こえてくる。振り向きたくない。だつて後ろには・・・、

「ちよつとお、何固まつてんのよ銀ちゃん！さつきから立ち聞きしてれば、やれパスタだやれピццаだつて腹減るのよ。あ、お三方どうもー。私、黒葉美代と申します。名前覚えたわよ、ドイツ、イタリア、日本でしょ？んまー、どっかで聞いた事ある名前よね」

一同唾然。口から流暢に空気の読めない事べらべらまくしたてる女に唾然するのは当然だろう。

と、ドイツがぽつり。

「アメリカに劣らないと思うんだがこの娘」

「以上だと思えますよ」

「ヴェー……」

と続き、

「やつほう銀ちゃん。私もボロネーゼっての食ってみたいアル。ところで此処何処？」

「ちょ、神楽ちゃん、何普通に話してんの！銀さん、よかったあ。

偶然か知りませんが、そのの茂みに落ちちゃって、そしたら美代さんと神楽ちゃんが隠れてようとか提案しだして……」

ああもつ何でこうなる。

多分、大部分は美代が悪い。絶対美代が悪い。

やっと我に帰ったイタリアが、白旗をひろい、にっこりとこう言った。

「じゃ、7人でパスタ食べよっか！」

次回へ。

第二話 定番事項が自己紹介(前書き)

今日は白夜又再臨編とこれを更新です。

ああ・・・文字数の差が・・・いくつだ・・・二倍だ・・・申し訳
ありません・・・。

明日は・・・血濡れ夜又更新したいな・・・あとは白の話。

では、本文をどうぞ！

第二話 定番事項が自己紹介

「ぷっはあ、食ったアル。こんなうまいモン生まれて初めて食ったアルヨ！」

「・・・パスタ全部無くなっちゃった・・・何なんだよこの子ー！家のパスタみーんな食べちゃった！！」

さて、ペイント弾騒ぎから、美代、新八、神楽の登場という事態の後、イタリアの家でパスタをご馳走してもらったのだが・・・。

遠慮を知らないのか、怒涛の勢いでパスタを平らげたチャイナ娘に微妙にほこぼこしているイタリア。だが、

「・・・では、貴方がたの事をお聞かせ願えますか？」

という日本の言葉で一時休戦。

「俺達の？俺達は江戸っ子ー所に居たんだが、でっけー穴・・・か？それに落ちたんだよな新八」

「えっ、あ、はい。気付いたら、此处に居て・・・」

うんうん、と頷き考え込む日本にちらと視線をやり、またすぐにイタリアに目をやる。

「おいそこのくるん。もっとパスタよこせヨ」

「お前がみんな食べちゃったんだよ！ヴェー・・・これから何食べ

よ・・・」

「ピッツアでも食べ」

「おお！ドイツそれ名案！」

呆れたようにため息をついたドイツは、そのままテーブルに腕を組み、銀時達に問う。

「その穴というのは、具体的にどういったものだ？」

「普通の、底が見えない真つ暗な穴です」

「成る程、似ていますね」

へ？と声をあげたのは万事屋三人。真剣な顔をして、言葉の主、日本は続ける。

「此処でもそういう事件が起きているのです。始まりは、ある南の村でした。多数の血痕と共に、村人が消えていたという話です」

「あつ、そうそう。それが段々北に来て・・・俺は見た事無いけど、大きな穴に落ちる人達を誰かが見たんだ。他の所じゃ、穴に落ちた瞬間、見えない刃物みたいなもので体をバラバラにされたっていう・・・。えーっと、何処だっけ？」

「ロシアじゃなかったか？あそこは国土が広い、確かバルト三国の一人がポーランドに話して、お前が聞いたんだろう。それはさておき、今現在はヨーロッパ・・・と言って分かるか？まあ、そこを中心にして人が消えている」

「今、世界人口の10分の1が、その穴に巻き込まれ、姿を消しています」

彼ら三人から聞かされた事に、顔を見合わせる。

あまりにも怪奇というか、恐ろしい事件だ。

と、ここで新八が「そっか！」と声をあげる。

「僕達が此処に来たのと、その事件が、何らかの関わりがある。そう言いたいわけですね？」

「はい。恐れ入ります」

「・・・まあ納得は出来るのだが、憶測にすぎんだらう？」

「何をおっしゃってるのですかドイツさん！二次元からのトリップには三次元の何かしらが関わっているものなんですよ！」

「」「」「」「」「」「」「」

何なんだこの日本とかいう奴は。

「しかしまあ、何らかの関わりがあんなら、事件解決に向けて協力するのが筋だな」

「ヴェー！？協力してくれるの！？うわーい！そう言ってくれと心強いなあ！じゃあ改めて自己紹介しようよ！俺イタリア！」

「ま、またするのか・・・俺はドイツだ」

「日本と申します」

「俺は坂田銀時」

「あつ、僕は志村新八です」

「神楽ヨ。イタリアとかいったアルな。パスタよこせよ」「いやーだー！！」「」

また神楽とイタリアの言い合いが始まった。あ、イタリアが白旗乱舞しだした、負けたなこりゃ。

「つーか、ドイツとか日本とかイタリアって変わった名前だな」

「ああ、これは「あぁー」って！！」「」

ひいっ！と白旗乱舞から白旗縦横無尽になるイタリア。

ん？あれ、この流れはまさか……。

「思い出した！日独伊！国の名前よ！」

忘れてた！……この女、美代の事を。

「何、国？」

「さっき玄関に世界地図あったから見てみたのよ。江戸とまったく変わりなかったわ。私達の世界は、江戸、つまり日本を中心しているのよ。私は外国とか興味ないし、行った人も知らないけど、そんな名前の国があったのよ」

「ほう、私を中心ですか。何だか想像できません」

「一応あつちの世界にも存在はしているんだな」

「そうだねー。連合組はいるのかなあ？……あれ、何、みんなそんな驚いた顔してんの？」

「あかさ、お前ら、何者？」

銀時の問いに、丁重に答えたのは日本だった。

「私達はそれぞれ、自らの名前となっている国を統べる者です」

「統べる？」

「おや、この表現では難しいですね。簡単に言えば、国の化身です」

「」「」「へ？」「」「」

さっきの名前という国名に気付いた（空気読めない）美代でさえ、目を点にしている。

「じ、じゃあ僕達なんかよりずっと長生きしているわけですか？」

「ええ私はざつと2000年と幾年です」

「俺は統一が1861年だから150年は生きてるかなあ。でもも

つと前から『イタリア』はあつたし、まあ500年くらいかなあ」

「俺は・・・幼少の頃は覚えていないのだが、イタリアと同じくらいか、300年くらい後か・・・」

「・・・ドイツんちって、なんか昔から国名変わったりとかすごいもんね」

「ふむ、まあ覚えていないものは仕方がないな」

「・・・駄目アル、人間の会話じゃないネ」

「ええ、私達、国家ですから」

はあ、とため息をつく万事屋三人。

だが一人、珍しく真面目な顔をしている美代がいた。

第二話 定番事項が自己紹介（後書き）

年言ってる時に、イタリアの（ドイツの後のあのセリフ）微妙な間に気付けたら天才。

何故かって？いえ、ただの冗談です。

あの間の意味、ヘタリア好きな方（特にちびたりあ見てる方）は分かる人もいます。

この小説では、ドイツ＝神聖ローマです。別に今は関係ありませんが、後々使います。

では、感想、評価、よろしくおねがいします！

第三話 根は真面目なんです（前書き）

どうも、つい最近、終戦後の事を社会でやって歴史がさっぱり分からない作者です。

第二次世界大戦の話ですね。ちなみにこの小説、戦争の内容はふわふわ（？）してませんから。あの、本家様みたいに。

では、本文をどうぞ！

第三話 根は真面目なんです

「ところで」

さて、場所はイタリアの家。彼に出してもらったジェラートをばくつきながら、口を開いたのは銀時だった。

「国つてのはお前らだけじゃねーんだろ？他には誰かいんのか？」

「ええ。我々枢軸国と連合国が、今協力して事件解決に取り組んでいます」

「枢軸に連合？何ですかそれ」

「いわば、国の集まりです。名を変えれば元軍です」

「嫌な響きですね、軍つて・・・」

「今はそれなりに平和だが、70年も前に遡れば戦争の時代だ。その名残か、枢軸国である俺達と連合国は・・・まあ、仲は悪くないが、よくもないな・・・」

「いえ、こつという関係を仲がいいというのですよドイツさん」

まったく話についていけないのがイタリア、神楽の二人である。美代がついていけるのは珍しい。

だが、話がずれているような気がする。軌道に戻そうと、少しまともになった美代が口を挟む。

「その連合国とかいう国はいつたい何処？」

言いながら世界地図を広げる。後で聞いたのだが、イタリアに貰ったものらしい。

地図には既に、赤いペンで丸がつけてあった。ちなみにドイツ、イタリア、日本の三国だ。

美代は連合国は青い印をつけるつもりなのだろう、青いペンを片手に持つ。

「えっとねえ、アメリカ、イギリス、フランスに中国、ロシアだよ。場所分かる？」

「そーだな、アメリカはここ。ヨーロッパに浮かんでる島国がイギリス。ドイツの隣がフランス。アジアの大陸にあるのが中国。その上のでっかいのがロシアね。うん、ありがと」

ペンをしまい、世界地図を丁寧に畳むと、椅子に座り直し、美代は言う。

「そーいや、さっき戦争とか言ってたわね。私、刀でざっくざくする戦争しか知らないのよ……。ね、銀ちゃん」

「まあ間違っちゃいねーが俺にふるな」
「そうだな、さっき言っていた俺達枢軸国と連合国とではらく世界大戦とも呼ばれる事をしていた。今の平和は、その上に成立っているようなものだ」

「俺その話聞くと眠くなるんだよなあ。俺は説明苦手だし、歴史の本いっぱいあるから読む？」

話聞くのが苦手な美代は、その誘いを快く引き受けた。

「その連合国は、此処に来ないアルカ？」

「明日、アメリカさんちに皆で行きます。今日でもよかったです。が、ちょっと用があるらしいので、明日にしました」

と、急に困ったような表情をする日本。

「さて、これからどうしましょう。イタリア君、今何時ですか？」

本を片手に、質問しまくる美代の対応に困っていたイタリアが、まるで観音様を見るように日本を振り返る。

「あ、えっと、4時だよ」

「ちよつと、イタリアちゃん。この国ってさあ……」

「何だ？此処に来た瞬間真面目になりやがって」

「まあ……真面目ならいいでしょう。ね、神楽ちゃん」

「うん、ソールナ」

やれやれと首を振る万事屋三人に、枢軸国はつい数時間前の事を思い出していた。

……静かで結構。

「じゃあ皆で俺んち観光する？ね、ドイツ、いいでしょ？」

「あー……まあ一日くらい構わんが」

「本当?!俺こんな事もあるつかとビスコッティー焼いたんだ!適当に一回りして、ドイツんちのあたりで食べようよ!」

「ちよつと待て!何で俺んちなんだ!？」

「ドイツんちつて景色きれいなんだもん。ね、銀時、お前もそれがいいって思うだろ?」

「あー、パスタ!銀ちゃんに馴れ馴れしい口聞くなヨ!」

「神楽ちゃん!パスタじゃないでしょ!すみませんイタリアさん、多分、妬いてるだけです」

「あははっ。神楽も新八も、『エド』?の人つておもしろいねー! あっ、もちろん美代も」

「……で、結局俺んちも行くのか？」
「「「もちろん」」」

はあ、というため息は見事なまでに無視される。

「申し訳ありません。私は遠慮させて頂きます。家も、此処から遠いので……」

「えー。俺んちに皆泊まろうよー。ね、日本！」

「イタリア君がそう言うてくださるのですたら……。恐れ入ります、すみません」

「だから、何で謝るの?？」

丁寧に頭を下げる日本に、あたふたと対応に困り、ドイツに助けを求めるイタリア。

彼らを、珍しく冷めた目で、というよりも冷静な目で見つめるのは美代だった。

「ドイツ……、神聖ローマ帝国……か」

彼女の手には、写真サイズの小さな絵。

少女と少年。しかし、左耳の上あたりにある、くるんで、少女が誰だかは分かった。

二人とも幸せそうな笑顔。よく見ると、横に名前が書いてある。

少女の横には、Italy、つまりイタリア。

少年の横には、Holy Rome、神聖ローマ。

「似てる・・・ね、この二人」

絵の少年、神聖ローマという国(?) ドイツを見比べ、美代は一人
眩いた。

第三話 根は真面目なんです（後書き）

次回予告

イタリア観光&ドイツさんちプチ観光（?）。

まだほのぼのです。

美代が真面目です。空気壊さない美代は美代じゃない！（おい）

第四話 ただのヨーロッパ好きによるイタリア&ドイツ観光（前書き）

題名、冒頭の通りです。

明日のテストの勉強無視して書きました。

では、本文をどうぞ！

第四話 ただのヨーロッパ好きによるイタリア&ドイツ観光

イタリアもドイツも大好きだよ！でも地理とか分かんないよ！b
Y作者

あまり時間が無いので、通り過ぎるだけのイタリア&ドイツ観光。

しかしながら、江戸とは明らかに違う文化に、四人は大興奮である。

「あつ、おいパスタ！あの塔何で傾いているアルか?!」

神楽がスカートをふわふわさせながら（実は数分前に全員服を着替えている）有名な世界遺産を指さす。

その質問に、満面の笑みでイタリアは答える。

「うん？あ、あれかあ。ピサの斜塔だよ。確か、地盤が何か変になつてあんなふうになつちやつたんだよねえ」

「しかし、皆さんとても親切で助かりました。江戸の人達とは、やっぱりちょっと違いますね」

シャツと七分のズボンというラフな恰好をした新八が、辺りをきよるきよるしながら言う。彼もまた、イタリア文化に感動しまくっていた。

「ええ〜？俺基本誰にも優しいよー。特にベツラには優しいんだあ。ね、ドイツ、日本」

「だからといって、神楽や美代に手を出すんじゃないぞ」

「だいじょーぶつ。大事なお客さんに手え出したりはしないよ」

ぴんと指を立て、片目をつむり、いかにも愛らしい表情でにっこり笑うイタリアに、ドイツも失笑を返す。

「いつ見ても素晴らしいです・・・イタリア文化は・・・。何枚写真撮っても飽きませんよ」

「分かるわあ、その気持ち。江戸は機械と発展の町だけど、文化っていいもんね」

白いワンピースを着こなした美代が日本の言葉にしきりに頷いている。

「ありがと。昼だったらいっぱいお店があるんだけど。もう6時か。そろそろドイツんちに着くよー」

「そういえば、町並みが変わってきた気がするな。もうドイツか？」

「ああ、後10分程歩けば、それなりに景色がいい丘に着く。夕日には少し遅いが、そんなに待たんでも星くらいは見えるだろう」

「なるほど。お前さ、女と話した事あるか？」

「お前それを聞いて何の得になるんだ？」

おそらく、銀時はその厳格な軍人口調を聞いて上のような質問をしたのだろうが・・・まあ何というか、呆れ顔で返される。

四人（+祖国の五人）は相変わらず、このドイツの町並みに興奮気味のまま歩き続け、先程ドイツの言っていた丘にたどり着いた。

「うわあ〜！星綺麗だねー！」

「イタリア、星に感動しているヒマがあったら、その手に持っているバスケットからビスコッティーを出してやればどうだ？」

「あつ、はーいつ」

と、バスケットからビスコッティーを一つずつ出して全員に配る。

「まだいっぱいあるからねー。どんどん食べて!」

「あの、私も、おにぎりを作ってきたのですが・・・」

そうやって、日本は首にかかっていた風呂敷(漫画に出てくる泥棒のよう)を外す。

すると、中からは十数個のおにぎりが。

「これ、日本さんが作ったんですか?」

「はい。もしも時間が遅くなった時の為に、こっそり作ってたんですが・・・」

「美味しそうですよ!こちらもいただきます」

「ビスコッティーはドルチェだねー。これはシャケ?いただきます!」

「こんなことならヴルストでも持ってくるんだっただな・・・」

「おーっ、賛成っ!」

と、神楽が一言。

「むぐむぐ・・・うまいけど銀ちゃんのほうがうまいアル」

「神楽!お前礼儀ってモンしらねーのかよ!?!」

「いえ、お気になさらず。仲がよろしいですね」

「あつたり前アルヨ。私達家族アル。な、新八」

「そうだね、神楽ちゃん」

そう笑う二人に、銀時も照れ隠しか「うっせーよ」と返す。

三国も、その三人の様子に思わず笑顔になる。

こうして、つかの間の幸せは過ぎていった。

次回へ。

余談。

「イタリアー。これ、イタリアの？」

美代がイタリアに見せたのは、あの絵。

ちょっと振り向いて「なになに？」と聞いてきたイタリアが、顔を少しこちらに向けた姿勢で固まっている。

ドイツが彼らを呼んでいるが、イタリアは「先行つてて！」と叫び返し、くるりと美代に向き直る。

「はい。この女の子、じゃないね、男の子。イタリアでしょ？この絵、あなたが貸してくれた本に挟まってたんだけど……。神聖口ーマって誰？」

「……。そーゆーの、単刀直入に聞く？普通」

一瞬笑顔を消し、またすぐに笑う。しかし、それはどうみても作り笑顔にしか見えない。

「だって、世界地図にそんな国ないし……気になるのよねえ」

「地図に無い理由知ってて聞いてない？」

「まあ、大まかには」

「じゃあ、それで合ってるよ。もういない、俺の大切な人、でいい？」

「いい？と聞かれても……。美代は右手の人差し指を唇にあて、考え込むそぶりをした。」

「ねえ、本当にいないの？まだ彼は生きてるんじゃないか？」

「ヴェ……。何でそう思うの？」

「勘と見た目」

「何だよお、それ」

笑いながらくるりと踵を返し、振り向きざまこう言う。

「そんなに気になるなら本人に聞いてみたらー？」

と笑顔と共に告げ、すたすたと一人で歩いて行ってしまった。

やはり一筋縄じゃいかないか、イタリア・ヴェネチアーノ。

はあ、とため息をつき、「待ってー！イタリアー！！」と後を追いつけた。

第四話 ただのヨーロッパ好きによるイタリア&ドイツ観光（後書き）

次回予告

やっと連合が出ます！

アメリカと美代の空気クラッシュー対決的な何か。

ちなみに余談の所は、前回出てきた絵の事です。

では、感想、評価、よろしくおねがいます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8456s/>

ヘタ銀 侍と国家と殺人ホール

2011年10月7日17時58分発行